

2025年1月26日（日）主日朝礼拝説教

『主の恵みの年』 井上隆晶牧師

レビ記 25章 10～12節、ルカによる福音書 4章 14～30節

### ①【ユダヤ教の礼拝】

今日は最初の宣教の個所を学びます。イエス様はいつもガリラヤ湖畔のカファルナウムという町を拠点として活動されますが、今回は生まれ育ったナザレの村に来て宣教なさいました。16節に「いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。」とあります。いつものとおりとありますから、イエス様はいつも安息日には礼拝を守っておられたということです。礼拝の中で聖書を読むとき朗読者が立つだけでなく、聖書を聞く聴衆も皆立って聞きました。イエス様の聖書朗読とはどのようなものだったのでしょうか。聞いてみたかったです。17節に「預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目にとまりました」とあります。当時の聖書はまだ一冊の書物になっておらず、律法や預言書は羊皮紙に書かれ巻物になっていました。神戸のユダヤ教の会堂（シナゴーク）に見学に行ったことがあります。真ん中に朗読台があり、壁をくりぬいた棚の中に巻物があり、カーテンで隠されていました。今でも巻物の形に似せて置かれているのです。会衆は聖書を持っていませんから、会堂でしか聖書を読むことができません。みんな聞き漏らさないように、耳を澄ませて聞いたのです。聖書朗読はとても大切なもので、専門の朗読士が読むか、その日に礼拝に来たお客さんが朗読をしました。

●4世紀の聖ヒエロニムスは「私たちは聖餐の神秘においてキリストの肉を食し、キリストの血を飲むが、聖書朗読においても、やはりキリストの肉を食し、キリストの血を飲むのである。私にとって福音書は、キリストのからだであると思う。私たちはイエス・キリストに近づくように、福音書に近づかなければならない。」と言っています。聖書を上の空で聞く人、聖書を軽んじる人は、キリストの体と血を地に落とし、汚すことになるのです。気をつけて聞きましょう。

### ②【イエス様によってヨベルの年が始まった】

この日、イエス様に旧約聖書からイザヤ書の巻物が渡されました。巻物を開くと61章が目にとまりました。聖書というのは読んでいる時に、妙に目にとまる箇所、心に響く箇所、これは自分に言われているのではないかと思える箇所があるものです。それがルカ4章18～19節にのせられています。

「主の霊が私の上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主が私に油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」イエス様は朗読を終えると、巻物を巻き、係りの者に返して席に座られると、会堂にいるすべての人の目がイエス様に注がれまし

た。会衆はイエス様がここからどんな話をされるのか注目したのです。するとイエス様は、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」(21節)といわれました。

イエス様が洗礼を受けた時、天から聖霊がイエス様の上に下りました。これはメシアとしての任職式でもありました。昔、王、祭司、預言者は頭に油を注がれ、その職に任じられました。メシアはこの三つを兼ねているのです。油は聖霊のかたどりです。牧師も頭に手を乗せられ「聖霊を受けよ」と祈られて、その職に任命されます。メシアとしての働きは四つあります。1「貧しい人に福音を告げ知らせること」。この貧しさは心の貧しさです。2「捕らわれている人を解放すること」。罪や悪霊に囚われている人を自由にする事です。「目の見えない人に視力の回復を告げること」。これは、肉体の視力だけでなく、心の目を開ける事です。4「圧迫されている人を自由にする事」。です。そしてこの4つの活動を一言で言うと「**主の恵みの年を告げる**」(19節)ということになります。「**主の恵みの年**」とは「**ヨベルの年**」(レビ 25 章)の事です。ヨベルとは雄羊という意味で、雄羊の角でできた角笛を吹いて始まる解放の年を意味しています。この年は50年ごとにやってきて、その年には出稼ぎの人も自分の家に帰り、売られた土地も元の所有者に返され、奴隷も皆解放されて自由になり、借金も帳消しになりました。メシアはこのヨベルの年をもたらす者なのです。

●先日、カトリック玉造大聖堂で一致祈禱会をいたしました。今年の式文は、北イタリアにあるエキュメニカルなボーゼ修道院共同体によって作られました。このボーゼ共同体を創設したエンゾ・ビアンキという人が『みことばを祈る』という本を書いていて、私はそれをたまたま持っていたのです。そこを開くとこう書かれていました。「イエスは聖書朗読の新しい深め方を教えてください。なぜなら聖書に書かれている事をご自身において実現されただけではなく、神の言葉を、いつも、「今日」と結びつけられるから。キリストはイザヤ書61章のくだりを読まれる時、それを「今日」と関わらせ、聴衆は幾世紀も前のイザヤのこの言葉がイエスの告知によって「今日」となるのに気づき、その「今日」の前で愕然として襟をただす。私たちの聖なる読書もそうならなければならない。この預言は「今日」実現したのである。」

イエス様は「**私によってこの恵みの年、ヨベルの年が始まったのだ**」と宣言されたのです。実際、イエス様は貧しい人に福音を告げ、悪霊を追い出し、病気を癒し、死人をよみがえらせ、人々を罪の力、死の力、悪魔の力から解放されていきました。イエス様によってこのヨベルがユダヤ人だけでなく、全人類に及んだのです。しかも50年毎ではなく、イエス様がおられるところ、どこでも、いつでもヨベルの年になるのです。今年もです。なぜなら、イエス様がヨベルの年本体だからです。キリストがおられる所には、完全な赦しと、命と、自由があるのです。キリストは今もいつも世々に私たちと共にいますから、今日、初めてこの聖書の言葉を読む者の上にも、この言葉は実現するのです。借金は帳消しになったと神自らが宣言します。神キリストがそれを実現したからです。キリストが共にいる

ことは何という恵みでしょうか。

### ③【神を知ることによって、人は本当に自由になる】

最初、ナザレの人達は大喜びしました。これで自分たちはローマから解放されて自由になり、生活も楽になると思ったからです。しかしイエス様は「あなたがたは地方で私が行った奇跡をここでも見せて欲しいと言うだろうが、昔も病気が癒され、奇跡が与えられたのは外国人に対してであって、ユダヤ人にはではない。」といわれます。すると人々は憤慨し、総立ちになってイエス様を殺そうとしました。彼らが願っていたメシアは、自分たちの願いを聞いてくれる便利屋のようなメシアだったのです。外国人にあって、ナザレの人たちに無かったものは何でしょうか？それは神に対する謙虚さと信仰だと思います。ナザレの人達は、神を求めたのではなく、神のくれる物・恵みだけを求めていたのです。恵みを与えるなら誰でも良かったのではないのでしょうか。これは現代のクリスチャンにも言える事です。神を求めたのではなく、目の前の問題を解決する事に必死になっています。神を知ることが幸福になるための最短距離なのですが、目先の問題を解決する事ばかりに時間をかけています。

「ミラーリング」という言葉があります。親は赤ん坊にとって、自分を知るための鏡になります。親の行動や言葉で、赤ちゃんは自分は愛されるべき存在だと知ります。しかし愛を与える事のできない親や、機能不全の家庭で育てられた人は、自分という存在が分からなくなります。それが障害として出てきます。しかし私は、人にではなく、神に自分を映してほしい、神様を「鏡」にしてほしいのです。私の経験では、神の鏡に映った自分、神の目に映った自分は、とても尊く、愛される自分でした。そのような自分を知った人は喜びを知ることができるのです。

●19世紀フランスのカルメル会修道女で、幼きイエスのテレジアと言われる聖人がいます。4歳の時に母親が亡くなり、母親代わりの姉も修道院に入ってしまう、自分も16歳で修道院に入りますが、結核になり24歳で亡くなります。しかし死後、彼女の残した三冊の自叙伝がたちまち多くの人々の心を捕らえ聖人になります。有名な言葉があります。「私は悟ったのです。愛は、あらゆる召命を含み、愛はすべてであり、愛はあらゆる時代、あらゆる場所を包む、愛は永遠である、と。私の使命、それは愛です。母である教会の心臓の中で、私は愛になりましょう。」彼女は自分の弱さ、小ささを神様からの恵みとしてぜんぶ受け入れ、神様を愛して生涯を送りました。「人の欠点をゆるすこと、他人に惜しみ無く愛を与えること、人に譲ること、誤解されても相手を責めないこと、批判されても甘んじて受けること、苦手な相手のためにも愛をもって祈り善行をなすこと」をモットーとしたようです。

たとえ親に恵まれなくても、神を鏡として自分を映した人は、このように愛の豊かな人になるのです。神は全ての人の親です。キリストは全ての人の伴侶です。その深い愛を知ることこそ、すべての奴隷からの解放となるのです。